

やかた  
館は見えていた

——ホワイトホール宮殿宴会場

今井 宏

(一)

1

今日は私の最終講義ということで大々さんの方々がお集まりくださって、ほんとうに恐縮です。東京女子大学に奉職しましてから四一年、「西洋史特殊講義」を担当しまして、いろいろなお話しをさせていただきました。最近思うことがあってちょっと調べてみました。サバティカルをいただいた二年と他の担当科目との関係で外していただいた年を除いて、ほぼ毎年「西洋史特殊講義」としてイギリス史の講義をしてまいりました。最初のうちは専門に勉強してきました一七世紀のイギリス、ことにピューリタン革命のことが中心でありましたが、だんだん私の関心が広がってまいりまして、イギリス近代史の全般をとりあげるようになりました。それには私自身の内的な要求ばかりでなく、外的な事情も働いております。というのも一九七六年に大学院に史学専攻の修士課程が設置されて、学生さんによつては二年生のときから修士の二年まで、五年間も聴講する人がでることになりました。同じ講義をお聞かせするわけにも行きませんので、手を変え品を変え、「西洋史特殊講義」のノートをつくるのに、大袈裟にいえば、悪戦苦闘の日々がつづきました。そのうえイギリス史で卒業論文を書く学生さんが二〇人もいるという年もかなりありましたので、彼女たちのまことに種々さまざまな要求にも応えねばならず、いつまでもピューリタン革命一本槍というわけにも行かなくなりました。これは愚痴を申しているわけではありません。お蔭で私の学問的な関心領域がしだいに拡大することになり、じつにさまざまな恩恵をうけることができました。この点は心から感謝しています。しかし心の奥では、いつの日にかまた原点に立ち戻りたいという、うずきにも似た感情が巣くっております。そこで今日、最

終講義という機会が与えられましたので、やはり古巣の一七世紀のイギリスに立ち戻ることにしたいと考えました。選んだ主題は、いまもロンドンに残っているひとつの建物であります。ここに三〇年以上も前に書きました文章がございます。それを読むことから始めるのをお許しいただきたく思います。

「ロンドンの地下鉄をウェストミンスターで降りて、表に出る。目の前にはイギリスの象徴ともいふべき『ピッグ・ベン』がそびえている。議事堂の北端にある時計塔だ。議事堂に沿ってしばらく歩くと、広場の奥にウェストミンスター寺院がみえてくる。その手前で右折する。両がわは古めかしい石造りの建物ばかり。ホワイトホールとよばれる官庁街である。

二本目の通りの左がわの奥をみよう。平凡な二階建ての家の前に、警官がたっている。『ダウニング街一〇番地』、いわずと知れた総理大臣官邸である。大通りを北上するにつれて、正面に立つネルソン記念塔がしだいに大きくなってくる。そこがトラファルガー広場だ。国立美術館の丸屋根もみえる。ところが左がわの建物のあいだに、なにやら人がいつぱいづめかけている。入口に、赤と白の衣装に身をかためた近衛兵が、馬にまたがって立っている。バックingham宮殿を護衛する騎馬近衛兵の交替をみようかと観光客が集まっているのだ。

通りをはさんだ向こうがわに、二階建ての建物がある。かつてのホワイトホール宮殿の一部、バンケットイング・ハウス(宴会場)とよばれた建物である。その一角のくびれたところに入口があり、みあげると誰かの胸像が飾ってある。そのうへは、昔は窓だったのだろうか、周囲とは色がちがっている。

じつはその窓から、外がわにもうけられたバルコニーのうへの断頭台に、ひとりの人物が進みでた。といっても、これは一六四九年一月三〇日のことであり、この人物こそは、いまなお胸像に面影をとどめているイギリス国王チャールズ一世である。

この日より三日まえのこと、反対をおしきつてあわただしく作られ、裁判を強行してきた特別法廷は、かれ国王にたいして死刑の判決をくだした。かれは『かつてに絶対的、専制的に支配する権力をうちたてて維持し、国民の権利と自由をくつがえそうという悪意をいだいて・・・議会とそこに代表されている国民に反逆し、不正な戦いをしかけた』というのが、判決文に書かれた理由であった。処刑台のまわりには、幕がはりめぐらされ、街路上の群衆の視線からはさえぎられていた。しかし周囲の建物の上からは鈴なりの人びとが見おろしており、

処刑が行われた瞬間、いっせいに重苦しい叫び声があがった、と伝えられている」。(今井 宏『絶対君主の時代』、河出書房新社、一九六九年、一四五―七ページ)

国王チャールズ一世の処刑になぜこの建物が選ばれたのか。国王の裁判が行われたのはいまは議会の建物の一部になっておりますウエストミンスター・ホールでありました。いまはクロムウエルの銅像の立っている後ろ側の建物がそれです。国王は裁判中にはセント・ジェームズ宮殿に幽閉されておりまして、処刑当日はキング・チャールズ・ストリートを通ってこの宴会場につれてこられました。この他にも処刑を行うのにふさわしい場所があったはずですが。なぜホワイトホール宮殿の宴会場が選ばれたのか、最初はいささか不思議に思いましたものの、いつしかこの疑問は姿を消してしまっておりまして。本日はこの疑問に対して多少なりとも答らしいものを引き出して、そのうえでこのホワイトホール宮殿の宴会場という建物のイギリスの歴史において占める象徴的な役割について、私な



ホワイトホール宮殿宴会場

りの考えをお話ししたいと思います。それが本日のテーマであります。

### (二)

まず最初にこのホワイトホール宮殿の歴史について簡単に触れておくことにしたいと思います。

もともと、この宴会場のあります場所の一带にはヨーク大司教のロンドンにおける邸宅——ヨーク・パレスがありました。いま議会のテムズ川を越えた向かい側にランベス・パレスという石づくりの古い建物が残っていますが、あれはカンタベリー大司教のロンドンの邸宅です。したがってそれと対になるのが、このヨーク・パレスでありました。

一五一四年にトマス・ウルジがヨーク大司教に就任しますと、彼はその拡張工事を始めます。このウルジという人物は、生年も定かではない卑賤の生まれから身を起こし、このヨーク大司教、大法官、そしてローマ教会の枢機卿カイディナルへと出世をとげるとともに、蓄財に励んだ典型的な聖職者政治家でありました。のちに「国王の一大事」に発展することになります。国王ヘンリ八世が宮廷の女官であったアン・ブーリンを見初めたのも、彼の邸宅を借りて開かれた宮廷舞踏会においてであったといわれています。ところがウルジがこの国王ヘンリ八世の離婚問題——正確に申せばヘンリとその王妃キャサリン・オブ・アラゴンとの結婚が無効であったとする証言を教皇から引き出すこと——の処理にあたったのですが、ローマの教皇庁との交渉に失敗して失脚してしまい、裁判にかけられる途中に亡くなります。一五三〇年のことです。するとヘンリ八世はウルジの邸宅があったハンプトンコートやオクスフォードのカーディナル・カレジ（現在のクライスト・チャーチ・カレジ）などとともに、このヨーク・パレスを没収して、それをホワイトホール宮殿と改名しました。そしてそれまでの国王の居城であったウェストミンスター宮殿が一五一二年火災によって消失してしまいましたために、ここに宮廷を移し、みずからの居室のほかには礼拝堂、娯楽施設などのさらなる拡張工事を実施したのであります。このヘンリ八世の離婚のゴタゴタからイングランドの宗教改革、国教会の成立があったことはご承知のとおりであります。ふたりの間に生まれたエリザベス女王は一五八一年にここに木造の宴会場を建築しました。テューダー朝からステュアート朝に代わると、一六〇六年にジェームズ一世がこの宴会場を煉瓦と石づくりの永久建築にすることに決めまして、その建物は一六〇九年にいちおう完成しました。ここで登場するのがイニゴ・ジョーンズなる人物であります。彼は最初はあとでお話いたします宮廷仮面劇の舞台装置や衣装を担当して有名

になっていましたが、この建物が完成しました翌年の一六一〇年に、皇太子ヘンリーの建築監督に任命されます。彼は舞台装置における遠近法を用いた背景づくりから建築への関心を深めていたのでした。彼は二度のイタリア旅行を経験していますが、一六世紀のイタリアの建築家アンドレア・パラディオの書物をもとにして、徹底した古典主義建築の手法を身につけました。一六一九年、このイニゴ・ジョーンズの監督のもとに宴会場の改装が始められ、二二年にはそれが完成しました。上下に七つずつの窓を配し、窓の間に上にコリント様式、下にイオニア様式の柱を埋め込んだもので、この様式は「パラディオ様式」とよばれて、これからのちのイギリスの建築に大きな影響を残すことになります。

さてこの改修なったホワイトホール宮殿宴会場が最も頻繁に使われましたのは、宮廷関係の行事、とりわけ仮面劇(masque)を中心にした宮廷舞踏会でありました。主としてベン・ジョンソンなどがシナリオを書き、イニゴ・ジョーンズはたいへん凝った衣装や舞台装置を担当しました。この仮面劇は、神話や伝説上の神々や正義や慈愛といった徳目を寓意する人物が仮面をつけて登場し、歌や踊りや芝居を演ずるものでありました。ここにイギリスの宮廷仮面劇はその黄金時代を迎えたと評価されています。この仮面劇はステュアート朝におけるひとつの王権についての意識を目に見えるかたちで表現するとともに、国王の権威、特権それに果たすべき責任についてのメッセージを伝達し、国王のもとでのイギリス王国の繁栄を寿ぐという、はっきりとしたシナリオをもっていたことに注目する必要があります。

この仮面劇が伝えたいと願ったメッセージを凶像として表現したのが、フランドル派の巨匠ルーベンスがこの宴会場の天井に描いた巨大な九枚の絵画でありました。ルーベンスがこれらの絵を委嘱されたのは、宴会場がイニゴ・ジョーンズによって完成させられるよりも前の一六二一年秋のことであつたようです。しかし交渉は一六二五年にジェームズ一世が亡くなったことと、ルーベンスが現在ルーブル美術館の目玉のひとつになっているマリ・ド・メデシスの一代記の大作に没頭していて多忙を極めていましたために中断してしまいます。正式の委嘱がなされたのは、ルーベンスがスペイン国王フェリペ四世の外交使節としてイギリスにやってまいりました一六二九年ごろのことでありました。外交交渉がまとまって、彼はチャールズ一世から騎士号とこの宴会場の天井画の委嘱をうけて、帰国いたしました。絵画制作の実際の仕事はルーベンスのアントワープのアトリエで多くの弟子たちの手を借りて行われました。

このアトリエは現在もそのままのかたちで残っていますから、お訪ねになった方もあろうかと思えます。絵画は九枚とも巨大なキャンバスに描かれました。大きいのもので九枚×六枚、細長いものは一三枚×三枚もあり、その放出する圧倒的なエネルギーでいまなお天井を仰ぎみるものに迫ってまいります。一六三四年の夏にすべての絵は完成し、翌年イギリスに向けて送り出されました。宴会場の天井にこれらの九枚の絵が据え付けられましたのは、一六三六年三月のことでした。

問題はこれらの絵の主題であります。チャールズ一世はよりにもよって父親のジェームズ一世とその治世を賛美することを求めたのであります。従って主人公はジェームズ一世なのです。これらの絵にはひとつひとつタイトルがつけられています。入口から奥にむかって三枚ずつがひとつの主題を扱っています。手前はジェームズ一世によるイングランドとスコットランドの「王冠の統合」、奥のものはジェームズ一世の統治がもたらした恩恵を称える趣旨のものであります。すべて神話を借りた寓意画ですが、主題はスコットランドからやってきてイングランドの王座についてスチュアート朝をはじめたジェームズ一世に対する称賛というか、その功績を褒めたたえることに絞られています。ジェームズ一世といえば、彼がスコットランドの王位にあつたときに『自由な君主国の真の法』（一五九九年）と題した王権神授説を主張するの本を書いたことで知られています。その王権神授説によってたつ彼への称賛をビジュアル化したのが、ひとときわ立派な中央の三枚でありました。その中央の絵は“The Apotheosis of James I”と題されています。「ジェームズ一世の神格化」とでも訳しましょうか。いなむしろ、日本流に言えば「現人神あらひとがみジェームズ」といった方がよいかもありません。といいますのも、かれジェームズは議会に対して「国王というものは、神のこの地上における代理人であり、神の王座に座るだけでなく、神みずからによつても、もろもろの神のひとりとよばれる」といったことがあるからです。これを要するに、まさに神から授かった王権を彼がいかに行使して、スコットランドとイングランドの王冠の統合を成し遂げ、ひいてはこの王国に平和と安寧をもたらしたかを視覚的に伝えることが、この天井画九枚の主題でありました。あからさまな王権賛美、王権神授説の擁護でした。ちなみにこの天井画が完成するとともに、照明に使われる篝火がそれを痛めるのを恐れて、仮面劇はこの宴会場を舞台として利用することはなくなりません。ここでスライドでこの宴会場の建物とルーベンスの描いた天井画をみていただこうと思えます。

ところでチャールズ一世はルーベンスに即座に委嘱料、製作費を払うことができませんでした。結局は当時の金で三千ポンドを二年後に支払いました。これは一九九〇年代の時価では二万八千ポンドになるといいますから、一ポンドを二〇〇円として換算しますと四、三六〇万円になりますか。これを高いとみるか、あるいは安いとするか、判断はおまかせいたします。問題はチャールズに即座に支払う余裕がなかったことにあります。先に申しましたように、天井画が据えつけられたのは、一六三六年のことでした。ところが翌年の一六三七年は一七世紀のイギリス史におけるひとつの重大な転機であったと考えられているのです。スコットランドでイングランド国教会の祈禱書の強制に反発して騒ぎが始まります。またイングランドにおいても、それまでは海港都市に限られていた船舶税という海岸線防衛のための費用にあてる税金が内陸地方にも課せられるようになったことに怒ったジョン・ハムデンという名前のひとりのジェントリが、その合法性に疑問を抱いて裁判所に訴えて、その裁判が開始されます。そして事態は一気にわれわれのいうところの「革命」へと傾斜して行くのです。

ピューリタン革命は一六四〇年秋の長期議会の成立とともに始まりますが、この革命の原因をどこに求めるかが、戦後の革命研究の中心的な課題であったことはいまでもありません。ここでその詳細を辿ることはできませんが、当初は革命で戦うことになった両陣営の構成を古典的なブルジョア革命としての階級的な分裂に求める傾向がみられました。ブルジョア革命といえば、国王を中心とする封建勢力に対して、新興のブルジョア階級が自分たちの手に国家権力を掌握しようとした革命である、と普通は考えられています。ところが実際に一七世紀のイギリスにおいて、このようなはっきりした階級的な対立があったのか、ひいては言葉の純粹な意味でのブルジョアジーとよぶに値する人たちが国王派に敵対した議会派の中心的な存在であったのだろうかという点がまず問題になりました。いろいろと研究が進められました結果、この革命を戦うことになった国王派と議会派の両方の陣営構成はきわめて曖昧で、必ずしも封建勢力対新興のブルジョア階級の対立という図式的なかたちに簡単に要約することはできないことが、はっきりしてきました。ジェントリというのは、貴族の下に位置していた社会層で、議会の議員になったり、地方行政を担ったりして、たいへん重要な役割を果たしていたのでありますが、このジェントリ層がまっ二つに分かれて対立し、戦うことになったのが、この革命でありました。ジェントリの分裂によって戦われたところに、この革命の他には見られない大きな特徴があったのであります。そこでピューリタン革命における国王派と議会派の対立をさして、「宮廷」

(コート)と「地方」(カントリ)の対立としてとらえる研究動向が有力になってきました。この二つの対極概念が生まれますのにあずかって力があったのが、戦後のイギリスにおける最大の歴史学の論争であった「ジェントリ論争」であったことは、つい先日にも講義でお話したばかりです。前者の「宮廷」は、絶対主義の宮廷を構成する人たち、聖俗の高位の官職や年金・独占などの特権を付与されている人たち、いっぽう「地方」というのは、議会や州共同体やロンドンのシティなどで一定の既得権益を有しながらも、「宮廷」からのさらなる恩恵にあずかれずに疎外されていた人たちをさします。そして注目しなければなりませんことは、この対立には経済的な利害の対立だけでなく、それに平行して文化的・倫理的な価値観の対立が付随しており、「宮廷」を対極におく「地方」のイデオロギーが形成された、と考えられるようになったことでもあります。別表でも記しておきましたが、「地方」に属していた人たちは、「宮廷」こそは「邪悪、奢侈、腐敗、都会、乱交、酩酊、外国かぶれ、疾病、追従、新奇な行政と専制の促進者、教皇主義」から成る価値観に基づいて行動している。それに対して自分たち「地方」のメンバーが尊重するのは、「有徳、節儉、正直、田舎、純潔、素面、ナシヨナリスト、健康、率直、古いやりかたと古くからの諸自由の擁護者、プロテスタント(ピューリタン)」から成る価値観・世界観だということです。こうして「宮廷」対「地方」という二つの「政治文化」の間にしだいに緊張が高まっていき、ついには後者の前者からの離反を招き、革命が勃発したとみるのです。ここで個々についてはいちいち解説は加えませんが、ホワイトホール宮殿宴会場の建物そのもの、またそこで繰り広げられた饗宴のありかたは、まさにこのような「地方」側からの「宮廷」に対する批判にぴたり適したものでありまして、別のいいかたをすれば、「地方」の眼からみた「宮廷」の諸悪を体現していたのが、このホワイトホール宮殿宴会場でありました。いささか論理が飛躍しているかもしれませんが、チャールズ一世の処刑場としてこの場所が選ばれた最大の理由は、この建物が「宮廷」の文化を象徴するものであったからであると考えることが許されるであります。直接処刑場の選択理由を語る史料がありませんので、推測の域をでませんが。



選択理由を語る史料がありませんので、推測の域をでませんが。



国王処刑後のイギリスは、一時期、国王も貴族院もない共和政という政治形態をとりますが、それがクロムウェルをリーダーとする護国卿政権へと代わり、革命のカリスマであったクロムウェルの死後は混乱がつづき、一六六〇年王政復古になります。王政復古であるかぎり、二つの「政治文化」の一方によって一時的に追い出されていたもうひとつの政治文化の復権でありました。しかし王政復古が実現する過程を調べてみますと、それはいわば革命政権の自己崩壊の結果生まれたものでありまして、けっして反革命勢力の全面的な勝利として実現したものとはいえません。その意味では「宮廷」と「地方」という二つの「政治文化」の妥協の産物であったといえましょう。それはともかくとして一六六〇年の五月、「街には花が撒き散らされ、鐘が鳴り響き、沿道には壁掛けが張り巡らされ、噴水にはブドウ酒が流れていた」と『日記』で有名なジョン・イーブリンは書き記していますが、それは処刑された国王の遺児チャールズ二世が十数年にも及ぶ亡命生活を終えてこのホワイトホールに入ったときの描写であります。

それではロンドンに帰ってきてこのホワイトホールに居を構えたチャールズ二世は、いったい何をしていたのでしようか。「国王のおさわり royal touch」が彼の公務でかなり大きな比重を占めたのであります。「おさわり」とはあまり品がよくありませんから、「瘰癧るいれきさわり」ということにいたしました。「瘰癧」というのは、結核性の腺病、すなわち結核菌によるリンパ腺の炎症で、顔が腫れあがってそのかたちも変えてしまうという恐ろしい病気です。それがイギリスでは「王の病 King's evil」とよばれていましたのは、国王が患者の患部にふれることによって、病気が治癒すると信じられていたためです。国王にはこの「瘰癧さわり」にみられるような奇跡を行う神秘性がそなわっているという信仰は、古くは一三世紀の後半からひろく西ヨーロッパの民衆のあいだに受け入れられていました。カトリック教会が必死になって否定しようとしたにもかかわらず、とりわけフランスとイギリスの両国でこの「瘰癧さわり」が盛んにおこなわれていました。そこには王権の支持者の獲得という思惑も働いていたであります。イギリスにおける国王の「瘰癧さわり」は一四八五年にテューダー朝による絶対王政が成立したから、とりわけ盛んに行なわれるようになりますが、テューダー朝とステュアート朝のチャールズ二世までの八人の国王は、それぞれの国教会ないしはそれが立て前のうえで中心的な教義としましたプロテスタントイイズムとの距離によって、「瘰癧さわり」

の頻度には大きな差がみられます。もちろんかの「ブラッディ・メアリ」（メアリ一世）はカトリックに復帰したのですから、おおびらにこれを行ないました。ステュアート朝になってからは、ジェームズ一世はスコットランドの国教であるカルヴァン主義の長老派教会のもとで育ちましたので、この慣行には乗り気ではありませんでしたが、ためらったすえ何回か行なっています。処刑されることになったチャールズ一世は国教会の信徒であり、国教会が「瘰癧さわり」を認めて正式に共通祈禱書に載せたほどでしたので、父親のような逡巡は感じることなくそれをつづけておりました。

さて王政復古で王座に返り咲いたチャールズ二世は、毎週金曜日にここホワイトホール宮殿の宴会場でこの「瘰癧さわり」に当たっていたのです。この“royal touch”に関しては、その起源から変遷と消滅の過程をそれを支えた民衆の共通の心のありかたを中心にすえて詳細に跡づけた、かのマルク・ブロックの難解で知られた名著が最近翻訳されまして、容易に接することができるようになりましたのは、たいへん喜ばしいことです。お手元の参考文献のところにあげました、『王の奇跡』（マルク・ブロック、井上泰男・渡邊昌美共訳『王の奇跡——王権の超自然的性格に関する研究、特にフランスとイギリスの場合』、刀水書房、一九九八年）がそれです。

マルク・ブロックによりますますこうなります。

「チャールズ二世の医師としての名声は、数字で計測が可能だ。一六六〇年五月——儀式の開始——から一六六四年九月まで、四年強の間に、およそ二万三〇〇〇人が触ってもらった。……だからブラウンが一六八四年に、『幸運なる王政復古このかた、国民のほぼ半分が聖なる国王陛下に触れられ癒された』と言ったのは明らかに誇張であるとしても、チャールズ二世ほど、奇跡の王として成功した者はいない。長期議会とクロムウェルの時代のい。……要するにチャールズ二世ほど、奇跡の王として成功した者はいない。長期議会とクロムウェルの時代の長期にわたる奇跡の中断は、かえって民衆信仰の火の手を煽る結果になった。長い間超自然の救済を奪われていた病人が、至尊の治療者めがけて狂ったように殺到したのだ。しかも、これは藁を燃やしたような一時のもではなく、……治世の間続いた。一六四七年の下院があれば軽蔑して迷信と決めつけた、奇跡の王権という観念は、およそ死滅するどころではなかったのだ」（訳書、四二四ページ）。

この「瘰癧さわり」の行事は、その一部始終がきっちりきまって儀式化されていきました。実際には病人は二度国王

の前に出ます。最初はつぎつぎに国王の前を通り、国王は患部に素手を当てます。それがすむとひとりずつ国王の前に出て、今度は国王は患部の上で十字をきります。その指には一枚の貨幣、通常は金貨が挟まれていました。それが終わると国王はあらかじめ用意されていた穴をあけてリボンに通した金貨を患者の首にかけて、終わりです。この金貨は大天使ミカエルの像を刻んだもので「エンジェル金貨」とよばれました。これを“touch piece”（お手触れ銭）といます。ところがこの「エンジェル金貨」はしだいに通貨としての性格を失って、チャールズ二世の治世には金額の表示のないメダルになっておりました。先にマルク・ブロックの文中でいわれておりますピューリタン革命中の議会、下院の決議とは、「瘰癧さわりの迷信について、民衆に公布すべき宣言」を起草する委員会を設置したことをさしています。もつともこの宣言じたいはマルク・ブロックもみつけることができなかつたようですが。

「瘰癧さわり」にこのような否定的な姿勢をとつたかぎりでは、ピューリタン革命は先に指摘した二つの「政治文化」の一方の勝利を明示しているかにもえます。じじつ共和政の時代ならびにクロムウエルの護国卿政権の時期にはこの「瘰癧さわり」は公式には姿を消しておりました。「瘰癧さわり」はいったん断絶していたのです。それが王政復古とともにチャールズ二世によつていとも見事に復活したわけであります。

“Interregnum” という単語があります。これは王政と王政の間の時期、王位の空位時代をさして用いられます。Puritan Revolution’ あるいは the Civil War といういいかたと並んで、今日でもこのタイトルでこの時代を論じた書物があります。内乱の時代、ことに国王処刑後の共和政と護国卿政権の時代は、連綿とつづいたイギリスの君主制が中断した時代であるという認識がこの単語の背後にあります。まさしく「瘰癧さわり」の復活ほど、この単語の持つ意味をはつきり示しているものはいえましよう。もうひとつ見逃すことのできないポイントがあります。それは先にお話ししましたルーベンスの天井画が無傷で今日まで伝えられていることです。ご承知のように革命の主体勢力であったピューリタンたちは、国教会にみられたカトリックの残り滓を排除することから出発したものでして、しかも厳格な禁欲主義を旨として、演劇や賭けごとを禁止し、華美なものには情け容赦のない破壊行為をすることを厭いませんでした。王権の至上を説くルーベンスの豪華絢爛な絵のごときは、まさに彼らにとって絶好の攻撃対象であつたはずです。それが無傷で残つたのは、まさに「奇跡」としかいいようがありません。あるいはこの宴会場につきまといるといわれたチャールズ一世の亡霊に彼らは怖じけづいたのでしょうか。

## (四)

どうもいまとなってあらためて考えてみますと、私どもの世代の人間にとりましては、「市民革命」という単語が先行していたように思えてなりません。明治以降の日本が辿った道の行き着いた先が第二次大戦の敗戦でありましただけに、日本の過去に対して自虐的ともいえる見方がとられました。否定すべき汚濁にまみれた日本に比べて、イギリスは輝かしい近代化の典型としてのバラ色のイメージで捉えられ、とりわけその過程でイギリスが経験した「市民革命」こそは近代化の決め手であるとの思いこみが、多くの研究者をしてピューリタン革命の研究に駆り立てました。正直のところ私どもの多くの研究は、一七世紀中葉以降の一連の事件にいかにして「市民革命」にふさわしい衣装をまとわせるかということに、そのエネルギーの多くを費やしてまいりました。

もういちど問うてみなければなりません。一七世紀の中葉という時期に国王チャールズ一世を処刑にまで追い詰めたひとつの「政治文化」はどこに行ってしまったのでしょうか。また「瘰癧さわり」に殺到した民衆たちは、復活した「宮廷」の文化に同化され吸収されてしまったのでしょうか。そんなはずはありません。この点に関して、ピューリタン革命における二つの「政治文化」の対立・抗争という考えかたを批判して、そこに民衆を担い手とする異端的な「第三の文化」の存在を認めようとする、クリストファ・ヒルが『ミルトンとイギリス革命』（一九七七年）で展開した主張を、考慮に入れねばなりません。この「第三の文化」の担い手たちは、第二の「地方」の政治文化を担った人たちに協力して革命に戦闘のエネルギーを供給します。以前に国王チャールズ一世の死刑判決文に署名した人たち——彼らを「国王弑逆者」(regicides)といいます——を調べたことがあります。その五九人のうち大半が「地方」の構成メンバーよりは低い社会層に属しており、一三人は生年すら判明しない人たちでありまして、伝統的な支配社会層からは「身分の低い、名前も聞いたことのない連中」として軽蔑をこめて語られた人たちであったことも、見逃すわけにはいきません。しかし彼らは結局は裏切られてしまう。この「宮廷」「地方」そして「民衆」の三つの政治文化の対立と抗争、吸収と同化といったからみあいのなかに、近代のイギリス社会が形成され展開し、そして結局のところは一九世紀のデイズレーリいうところの「二つの国民」の文化に収斂していくという見通しを私はもっておりますが、まだとてもその過程を詳細にお話できるほど煮詰まっておりますので、ご容赦願いたいと思います。先を急

ぎましよう。先に申しましたホワイトホール宮殿宴会場に幽霊がでるといふ噂が広まったのは、共和政の時期に宴会場が放棄されていたころのことでありました。ちなみにイギリスで国王の「瘰癧さわり」が姿を消しますのは、一七一四年のハノーヴァ朝の成立によってであります。しかしその前にホワイトホール宮殿宴会場はもう一度晴れの舞台装置を提供することになります。

一六八八年一二月逃亡したジェームズ二世と入れ替わるようにロンドンにはいったオレンジ公ウィリアムは、暫定議会の招集を決定して、翌年一月二二日この暫定議会が成立します。この議会において、今の事態をどのように説明するか、また王位継承をどうするかについて激論が戦わされたすえ、イギリス人の「古来の諸権利」がまとめられ、それがこのホワイトホール宮殿の宴会場において、オレンジ公とその后メアリの前で議会の代表者たちによって読み上げられたのであります。「権利宣言」とよばれるものがそれです。それは決して天賦人權論の立場にたつものではなく、「この王国の人民の、真の、古来から伝えられた、疑う余地のない権利および自由」、すなわちイギリス人の歴史的な権利の保証を求めたものであります。ふたりはこの「権利宣言」を認め、共同で王位につくことになりました。この「権利宣言」が二人の即位の条件であったかどうかについては、意見の分かれるところではありますが、これがいうところの「名誉革命」のクライマックスであります。こうしてホワイトホール宮殿宴会場は一七世紀のイギリスの歴史における節目節目に登場するという名誉を担ったのであります。

もう一度申し上げますが、イギリスで「瘰癧さわり」が行なわれなくなったのは、一七一四年にアン女王の死後、ハノーヴァ朝のジョージ一世の即位以降のことでありました。「瘰癧さわり」が行われなくなったのには、この王家が「瘰癧さわり」の慣行がなかったドイツからやってきたという事情も働いていたことでしょう。しかしチャールズ二世が「瘰癧さわり」を復活させてからおよそ半世紀の間に、もはや「奇跡を行なう国王」への期待は薄らいでいき、その支持基盤を失っていったと見るのが正しいと思われます。王権をみる眼は明らかに変わっていたのであります。あるいは王権を囲む政治文化の温度が冷えてしまったといってもよいでしょう。もはや王権は超自然的な性格をもつもの——「奇跡」を行うもの——とは考えられなくなっていたのです。そもそもハノーヴァ朝の即位そのものも、さきの「権利宣言」とそれを制定法化した「権利章典」をうけてあらためて一七〇一年に議会が制定した「王位継承法」によるものでした。その意味でおそらくはチャールズ一世の亡霊が見守るなかで、イギリスは議会主権にもとづく立

憲君主政を整えていったのであります。絶対王政から立憲君主政へ、その歴史の推移の証人こそが、ホワイトホール宮殿じたいは一六九八年の火災によって灰燼に帰しましたなかで、奇跡的にいまも残っているこの宴会場であったといえるであります。

イギリスといえば保守的であるというイメージが行き渡っております。たしかに君主制も議会もその起源は古い。その制度とそれを動かす人間が外見においては一見連続しているような見せかけを保っております。しかし内実においてはそれぞれの役割と機能が時代に応じて大きく変化していく、といったかたちで、イギリスはその歴史を展開させて行ったのであります。したがって連続性に眼を奪われてはその内部にみられた変革の契機を見落とすことになってしまふ。また逆に変革ばかり強調しようとすれば連続しているものが邪魔をする。このことがイギリスの歴史を理解するうえで重要なポイントであることにはつきり気がつくまでには、だいぶ時間がかかってしまいました。まだ私のイギリス史のジクゾー・パズルには埋めるべき空白の箇所が数多く残されております。これからはひとつでも多くの空白を埋める努力をつづけることができたらと願っております。

最後に、これまで私のつたない講義を熱心に聞いてくださった多数の卒業生と学生の皆さん、ならびにこの機会を与えてくださった史学科の同僚の方々、それに今日ご来場くださった皆さんに心からお礼を申します。有難うございました。

(付記)

本稿は一九九九年一月一日、東京女子大学講堂でおこなった「最終講義」のノートに手をいれて復元したものである。講義の性格上、注記は省略した。ちなみに当日会場で配布したレジュメに掲載した「参考文献」はつぎのとおりである。

(1) L. Stone, *The Causes of the English Revolution 1529-1642*, London, 1972. (紀藤信義訳『イギリス革命の原因』、未来社、一九七八年)

(2) P. Zagorin, *The Court and the Country: the Beginning of the English Revolution*, London, 1969.

(3) マルク・ブロック、井上泰男・渡邊昌美共訳『王の奇跡——王権の超自然的性格に関する研究、特にフランスとイギリスの場合』、刀水書房、一九九八年 (Marc Bloch, *Les Rois Thaumatiques, Étude sur le caractère surnaturel attribué a la puissance royale particulièrement en France et en Angleterre*, 1924 (1961)).

(4) Christopher Hill, *Milton and the English Revolution*, London, 1977.

(5) 今井 宏「ピューリタン革命における『国王弑逆者』たち」(『史論』第四七集、一九九四年)

また本文7ページで言及した「別表」はつぎのとおりである。

「宮廷」|| 「邪悪 (wicked)」、奢侈 (extravagant)、『腐敗 (corrupt)』、乱交・同性愛 (promiscuous and homosexual)、『酩酊 (drunken)』、外国かぶれ (xenophile)、『疾病 (diseased)』、追従 (sycophantic)、『新奇な行政と専制の促進者 (promotor of administrative novelties and new tyrannical practices)』、教皇主義の偏向 (popish leanig)』

「地方」|| 「有徳 (virtuous)』、節儉 (thrifty)』、正直 (honest)』、純潔と異性愛 (chaste and heterosexual)』、素面 (sober)』、ナショナリスト (nationalist)』、健康 (healthy)』、率直 (outspoken)』、古らざりかたと古くからの諸自由の擁護者 (defender of old ways and old liberties)』、『プロテスタント (ピューリタン) (protestant, even puritan)』。

開催にあたって多くの方たちのご尽力をえたことを、あらためて心から感謝する。なお、途中で上映したスライドの入手にあたっては在ロンドンのロビンソン||ウエルシュ・直子(旧姓勝部)さんをわずらわした。重ねてお礼をいいたい。